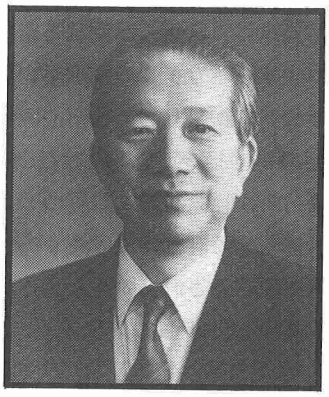
故　江上信雄先生

嶋　　昭　紘（動物学教室）



昭和60年３月の東大停年ご退官にあたり江上信雄先生は，理学部廣報16巻３号に『お別れ三題』と題するエッセイを寄せられた。そして，『さようなら理学部の皆々様，さようなら樹々達よ，小さな動物達よ，さようならクロよ，キャンパスよ』と東大を去って行かれた。その江上先生が，1989年10月17日午後９時29分，大腸がんのため永眠された。享年64歳。法名至心院釋暁學信雄居士（昭和25年８月10日授）。

昨年５月に国立公害研究所長をご勇退になった前後，先生がなにげなく口にされる言葉の端端から，先生のご健康状態が普通ではないと私は案じていた。紫綬褒章のご受章を不忍池を望むウナギ屋でお祝いした時，私の不安は一層強くなった。夏休みも終わりに近い９月のある早朝，江上先生の奥様から拙宅へお電話があった。３週間にわたる検査入院の結果が担当医から知らされたとのこと。その概要を私もうかがった。師の死期が近いことを知った。

健康状態が只事ならぬことを悟られた先生は，２週間に一度（その後一週間に一度に縮まった）の通院治療の傍ら，奥様の献身的なご助力のもとに，まず『学術月報』の執筆依頼に応えられ，同誌の学術研究の動向欄に『メダカの集団・個体・細胞・分子生物学（研究遍歴の一端）』を執筆された。ここでは，先生の45年間にわたるご研究の概要をまとめられた。今年に入って刊行された同誌（1989年２月号，pp. 85―93）の別刷を，1989年３月20日付けの私信と共に極く親しい人々に送られた。多くの方々が，事態を承った。

遡って昨秋，学術月報の原稿が脱稿するや，先生がもっとも愛されたメダカとのお付き合いを『メダカに学ぶ生物学』（中公新書931）としてまとめられるべく，執筆にとりかかられた。このお仕事も和子夫人の全面的なご助力によって，今年の７月25日をもって完成された。本年３月20日付けの上記私信では，“……今夏を目標に”メダカに学ぶ“（仮題）という小冊子を出しておきたいと思っております。……但し体力と気力の次第によっては実現しないで終わるかも知れません。……”と記しておられた。入院されて間もない５月のある日曜の午後，ペン先を上向きにして書いてもインクが途切れない宇宙ボールペンをお土産に病院へうかがった。既に校正刷りに普通のボールペンで（インクが途切れてしまうのに多少苛立たれつつ―和子夫人の言）朱を入れておられた先生は，“ほー。こんな便利なものがあるの？こりゃ便利だ。”といたくお気に召されたようであった。執筆や校正の一部は，先生の口述を奥様が筆記され完成された由，あとで奥様からうかがった。先生の気力はさらに『臨海実習』（ＵＰ1989年７，二百一号，pp. １－５，東京大学出版会）と題されたエッセイとなって結晶した。これは，昨年10月に逝去された吉田正夫博士への追悼であった。しかし10月14日にお見舞いした時，“つかれたよ”とおっしゃったように思えた。

10月18日朝，先生が昨年の秋以来常に鞄にいれておられた茶封筒が，和子夫人によって開封された。その時のための連絡先と共に，つぎの韻文を

拝見した。

はやうまれ　早寝　早起き　早合点
浄土へ参るも　ちょっと早めに
合掌

御冥福を御祈り申しあげる。